メッセージアウトライン マタイの福音書7：15～20 「良い木は良い実を結ぶ」

[15]「偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です」

今までイエスは偽善的な生き方をする律法学者やパリサイ人たちのような生き方に習わないようにと警告され、真の神を信じ従う信仰者として、まず神の国と神の義とを求めること、人をさばくのではなく、助け主なる聖霊により頼みつつ、人からしてもらいたいことは何でも同じように人にすること、そして狭い門から入り、いのちに至る細く狭い道を歩むことを教えられてきたが、ここからは偽預言者が対象にあげられている。

「偽預言者」とはだれのことか。旧約聖書の時代からこのような人々は存在した。「預言者」は神から超自然的な啓示を受けて、それを一般の人々に取り次ぐ人のことであるが、偽預言者は神から超自然的な啓示を受けもしないのに、「主はこう言われた」と偽って語る人物のことである。I列王記22：11～40で当時北イスラエルの王であったアハブが敵国アラムと戦うべきか否か迷っていたとき、ケナアナの子ゼデキヤという偽預言者が鉄の角を作って、「主はこう言われます。『これらの角で、あなたはアラムを突いて、絶ち滅ぼさなければならぬ。』」と預言し、他の偽預言者たちも同様に預言した。しかし真の預言者であるミカヤは王が戦死することを預言し、事実そのようになった。旧約聖書の様々な箇所でのような偽預言者が登場してきている。彼らの目的は何か。一言で言えば、それは私利私欲のためである。そして人々を正しい道から迷い出させ滅びへと追いやるのである。イエスは「彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来る」と言われる。イスラエル人にとって羊は先祖アブラハム以来の身近な存在であり、彼らは羊飼いとして生きてきた。彼らは羊の一頭一頭をみな覚えていた。イエスは今ここでは神を信じる信仰者たちが羊であり、その指導者、教師たちが羊飼いと表現されている。当時の羊飼いは羊の外套をまとっており、外側が皮で内側が毛(羊毛)といういで立ちであった。羊たちにとって羊飼いは頼るべき身近な存在であった。彼について行くことによって、牧草や水に与り、危険から守られるのである。ところが偽預言者たちは外見は羊の衣を着た羊飼いのようにして来るが、内側は貪欲な狼であるとイエスは言われる。狼は羊を餌食にする貪欲な獣である。そのように偽預言者たちは神の民、クリスチャンを滅ぼす存在なのである。

一般に偽預言者というと、イエス・キリストの再臨が何年何月何日にあるとか、今年の夏には大災害が起こるとか真顔で言うような人物のことを思い浮かべるが、ここでイエスが言われている偽預言者はそういう派手なパフォーマンスではなく、巧妙なかたちで教会、信仰者の群れに入り込んでくる。一見、彼らは敬虔で信仰深い人物のように見える。なぜなら羊のなりをしてから。それで多くの人はその偽りに気がつかない。これは危険なことである。それを放っておけばガブリとやられ、神の羊を盗まれてしまうことになる。

ではこのような人物を見分けるのはどうしたらよいのか。

次節以下でイエスは言われる。

[16-20]「あなたがたは彼らを実によって見分けることになります。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。良い実を結ばない木はみな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは彼らを実によって見分けることになるのです」

どんなかたちであれ、誤った考え、誤った教えがあるところには必ず誤った生き方が出てくる。ではどこが間違っているのか。それは彼らの教えには「狭い門」「細い道」がないのである。彼らの教えはその教え自体としては間違っていない。自由を説き、愛を説き、キリストの十字架を説くかもしれない。しかし、彼らが何を言っているかではなく、何を言っていないかによってその誤りを見破ることができる。エバがエデンの園で禁断の木の実を見たときのように、偽預言者は実に魅力的で感じのよい牧師や教師、指導者であるかもしれない。この世の人々からもほめられ、クリスチャンからもほめられ、厳しく批評されることもなく、誰に対しても人当たりがよく、心地よい感じを与える。しかし、そこには十字架のつまずきはなく、狭い門、細い道はない。その説教は人の心をかき乱さないし、不愉快も感じさせない。「あなたがたは今ままでやってゆけばそれでよいのです。ただ信じたならばそれでよい。生活態度も変える必要もない。聖書に書いてある細かいことなど気にしなくてもよい。神は愛だから赦してくれますよ。心配しないで自分の生活を楽しんでください」等々、実に気持ちの良いメッセージであるかもしれない。しかし、彼は信仰者の身につけるべき聖潔や御霊の実、そして人間の罪と神の義、神の怒り、神の裁きなどについてはほとんど語らない。神は天地万物の創造主、恐るべきさばき主、義なる神であることを思い、恐れおののくようにとは教えない。なぜなら彼自身もそのことを信じていない。口では信じていると言っても、その語っている教えがそれを否定しているの

である。これは聖書の一部を強調し、他をおおい隠すという方法であり、咎められ、責められるべきことである。

偽預言者、偽教師のメッセージは神に対する恐れを感じさせず、知らず知らずのうちに人々を滅びに至る道に連れて行ってしまふ。これが彼らの姿であり、結ぶ実なのである。

イエス・キリストの十字架は感傷的、ロマンチックなものではなく、本来、私たちが神の前につけられなければならない恐ろしい死刑の道具であり、また私たちの拭い去ることのできない罪の贖いと宥めの道だったのである。

この偽預言者は当時存在しただけではなく、いつの時代でも存在する。そして現代も手を変え、品を変え、新しいアプローチで私たちの目の前に現れ、滅びへといざなうのである。

→使徒20：29～30、Ⅱペテロ2：1～3

良い実を結ばない木はみな切り倒されて、火に投げ込まれることになる。これは神のさばきを受けて滅びに行くことである。私たちは信仰にしっかりと立って、何が本物で何が偽物であるかをその結ぶ実からよく見極め、主の恵みにより頼みつつ、天の御国に至る細く狭い道を歩んでいかなければならない。